## 書　評

伊藤航多・菅靖子・佐藤繭香編著『欲ばりな女たち――近現代イギリス女性史論集』（彩流社、2013 年）

大石　和欣

したたかな黒幕というのは同語反復（トートロジー）に聞こえるが、加えてチャーミングかつ志操堅固な黒幕女性となるとただごとではない。しかし、あらゆる意味で「表」に立てなかったイギリス近代の女性たちにとって、「裏」で人的ネットワークを築き、戦略的に行動し、障害を一つ一つ克服していくことは、社会での自分の居場所を確保するために必要不可欠な術であり、美徳でさえあった。

たとえばソフィア・キャサリン・チチェスタ（1795–1847）の例は興味深い。上流階級の家に生まれ、若くして夫を失った後、夫と別居した妹とともに裕福かつうるわしき寡婦として、男女同権思想を掲げて社会活動にまい進した。女性の自立を抑制する婚姻法への不満から、二人の姉妹はオーウェン主義者やフーリエ主義者、ジョアナ・サウスコット信者など急進的な思想家・宗教家や作家たちと交わり、経済的支援を行い続けた。1830 年代になると、女性の徳性を認め、家庭生活の政治性を議論することで、家庭と政治領域の境界を解消すべく、普遍救済論者（ユニヴァーサリスト）ジェイムズ・E・スミスを助成して雑誌『シェパード』を編集させる。上流階級に属する親族をはばかりこれらはすべて匿名のままで活動するが、1843 年に菜食主義を標榜する男女混合の協会を設立すると、その会長に就任し、堂々と政治活動を行うにいたる。女性として男女混合の組織の長になるのは、イギリス史上はじめてのケースかもしれない。

チチェスタのキャリアは、たんに「裏」で糸を引いていた女性が「表」に立ったという直線的な展開を示しているだけではない。女性にとって公共圏もフェミニズムのあり方も一様ではありえず、出版、階級、宗教、社

会、政治など異なるそれぞれの領域で多元的に存在し、さらに時間経過とともに変化さえする。一人の女性であっても複数の公共圏を横断しながら、時系列的にも立場を微妙に変えていくのである。[1]

前置きが長くなったが、本書が扱っているのはそうした18世紀後半から20世紀初頭のイギリスにおいて多元化し、変容していく社会・思想空間のなかで自己実現を追求したしたたかで芯が太い、しかし魅力的な女性たちの多様な姿である。社会的抑圧、因習的制約があるからこそ不満を感じ「欲ばり」にならざるをえず、また「欲ばり」であるがゆえに克服すべき障害に苦しみ、それに果敢に挑んだ女性たちの生きざまと思想、社会環境が克明に描かれている。論集はえてして寄せ集めになりやすいが、本書は趣旨も時代も整合性を保っているだけでなく、質の点でも粒がそろっている。編者の力量でもあろうが、互いの研究を熟知しているがゆえのチームワークであり、その結果としての優れたクオリティ・コントロールなのだろうと、研究者として羨望と敬意とを同時にいだいた。充実したテーマ講演を10回聴講するかのように、おおいに刺激を受け、新たに学ぶところも多かった。

冒頭で用いた「黒幕」というのは所収されている坂口美知子氏の論文タイトルの言葉を借りたものだが、論集全体を俯瞰するとむしろ「匿名性」という表現を用いるべきなのかもしれない。本書の各論文は、女性たちの個人的資質や市民アイデンティティを能記（シニフィアン）するはずの名前が認知されていない歴史状況をときほぐしながら、彼女たちがそれぞれの領域でどのように障害を克服し、公共圏へと活動領域を広げ、自らの名前を社会に認知させていったかを辿っているからである。

その匿名性を規定している大前提として、女性の活動領域を家庭に限定する「分離領域」主義があるわけだが、近年の女性史研究で議論されているのは、男性と女性が「外」と「内」に分かれていたかどうかではなく、父権主義社会のなかで女性たちが「家庭」という空間、あるいは「家庭性」というイデオロギーをどう巧みに用いて、「家庭外」と接点を持ち、社会へと活動範囲を広げていったか、さらに彼女たちが「家庭」と「家庭外」とを物理的にあるいは意識の上で往復運動する過程でどのような多元的公共圏が見えてくるかである。子育てや教育、室内装飾、服飾、社交、

消費など家庭や家政に関すること、またその延長線上としての慈善活動に関しては、女性たちは比較的に容易に社会活動を展開できたが、他方で政治、経済、さらには歴史、医療、科学、法律といった専門職や学術に関わることについては大きな壁が立ちはだかっていた。また、18 世紀半ばと 20 世紀初頭では状況が大きく異なってくる。本書の各論文は個別のケースをとりあげながら、「匿名」状態から抜け出し、自らの責任で実力を発揮する一市民へと地盤を確保しようとする女性たちの姿を追うことで、多元的な公共圏が築く見えない壁の複雑さを浮びあがらせている。

巻頭論文である梅垣千尋氏の「書く女たちの野望」は、「学識ある女性」の社会的プレゼンスの高まりを 1780 年代から 1790 年代にかけての出版状況を網羅的に論じることで検証している。女性読者数の増加と出版業界の再編、貸本屋の整備にともない、1770 年代から女性作家数が急増していく。「名誉」を求めて、ときに収入をもとめて「学識ある女性たち」はペンをとるが、表舞台に立つことにはリスクが伴う。男性からのバッシングを受けたり、著作権の交渉に際して不利な立場に立つことにもなる。児童書や教育書、詩など女性らしさや家庭性と矛盾しない領域に関しては臆することなく「実名」で出版しても、ウルストンクラフトやバーボールドなど政治論はすべて「匿名」で出版した。作家としてまだ無名な場合、不名誉な通俗小説を出版する際にも「匿名」であった。

歴史を書く行為も政治論と同じく女性たちにとって厳しい禁域であり続けた。伊藤航多氏は、アカデミズムにおいて実証的歴史学が確立していく過程で、歴史という国家や国民に関わるジャンルから排除された女性たちがそれにどう立ち向かい、最終的には歴史学者として名を成していったかを共感を持って描く。エリザベス・ペンローズやマリーア・コールコットたちの歴史物語は、ときに言い伝えも含めた物語として歴史を子どもに語ることで、母親たちに「教育者」としての公共心を植えつけ、「家族」と「国民」の境界をつなぐことに成功したが、エドワード・オーガスタス・フリーマンのように学術的な歴史学とアマチュア的な歴史読み物との序列化をはかる男性歴史家たちからの批判を浴びることになる。男性歴史家たちにとって女性たちは自分たちの下調べや校正・清書を行う「内助」の存在でしかなかった。その「匿名」状況に抗うようにして、ストリックラン

ド姉妹やメアリ・ベイトスンらは精緻な考証に基づいた歴史学を追究し、名声を確立していったのである。とはいえ、女性への学位授与はケンブリッジでは 1948 年まで持ち越されることになるし、結果として女性歴史家がアカデミズムのなかで公的に認められたわけではないことにもなる。そこにも女性たちが置かれた複雑な公権力との確執がみえてくる。

山口みどり氏と坂口美知子氏の論は、それぞれ英国国教会の牧師館と社交という空間において女性たちがしたたかで魅力的な「黒幕」であったことを教えてくれる。福音主義の浸透、国教会の構造改革を通して 19 世紀の牧師館は地域における役割を強化させていくが、そこになくてはならないのが妻や娘たちの「内助の功」であった。道徳的模範を示すことや地域の福祉や慈善、余興を管理することは彼女たちの仕事であり、その首尾いかんによって信仰を土台とした地域住民の結束力が変わってくるし、結果的に夫や父親の出世や権威も左右される。権威はなくとも実質的には夫以上に重要な役割を担っており、牧師館の真の支配者は彼女たちであったといっても過言ではなかろう。しかも、夫や父親の「聖域」に踏みこんだ言動をとれば批判をうける。したがって、山口氏が論じるように、「正面」から男性の聖域に踏みこむのではなく、「裏」で実権を掌握し、夫や父親を「操縦」する必要があったのである。「匿名」で急進的ネットワークを組織したチチェスタのものとは異なる国教会の公共圏が広がっている。

坂口氏が扱うデスボラ男爵夫人とキャサリン・ウォルターズも、同じ「魅力的で有能な女主人」であっても対照的な社会空間を構築していて興味深い。規模の程度は別として、自宅での社交は女性たちにとって公共圏と接触するまたとない機会であった。二人がホストする社交は、若い男女が結婚相手を探すだけではなく、政治家や文化人、ビジネスマンなどがネットワークを築いたり、密談する空間でもあり、「表」の世界を「裏」で操作する対抗公共圏をかたちづくっていた。こうした女性たちは必ずしも女性参政権運動に関与したわけではないが、だからといって「匿名」の状況に甘んじていたわけではないのは明らかである。「家庭」を核とした「親密圏」を社会に拡大することで、ネットワークを築き、社会的影響力を及ぼしえたのである。

それとは対照的なのが、出島有紀子氏と佐藤繭香氏の論文が扱う女性医

師と参政権運動に参加した女優たちである。社会的・政治的「匿名」状態の打破を目指して積極的に行動したことが検証されている。出島氏は、1858 年の医師法によって「医業から排除された」女性たちが、男性医師にかかることができない植民地インドの女性たちを救済するという目的（＝口実）をかかげ、インド、やがて本国でも資格試験の受験を認めさせ、医療活動に従事していく姿を追っている。1886 年には女性医師登録者は 50 人にのぼり、その 5 分の 1 がインドで活動中であるという統計数値は、女性医師たちにとって帝国主義がいかに不可欠の前提条件であったかを示唆していよう。イーディス・ピーチ＝フィップスンが述べたように、国内では手が届かない病院での雇用や研究機会がインドでは与えられ、自らの実力を磨き、発揮することが可能だったのである。

その彼女が帰国後、女性参政権協会全国同盟（NUWSS）に参加したのは当然に思われる。女性への差別に抵抗して医学を学んだエディンバラ大学時代からインドでの医療活動にいたる女子教育運動・倫理的活動の延長線上に位置づけたのである。1908 年のアンケート調査においてイギリス在住の女性医師 538 人のうち女性参政権に対する反対者が 15 名という事実は女性医師たちの考えを雄弁に物語っている。一方で、佐藤氏は同じ参政権運動でも女優参政権同盟（AFL）に焦点をあてて、女優たちが娯楽である演劇と政治活動である参政権運動を結びつけることで、まったく色合いが異なる公共圏との関係を構築したことを論じる。女優たちは自分たちの職業的技能を活用してプロパガンダ公演を行い、あるいはパジェントを通して女性参政権運動を明るく、自由で楽しいものへと演出し、大衆をとりこんでいったのである。階級横断的ダイナミズムは政治的「実名性」を女性たちが確保するうえで、重要な戦略だったのである。

「家庭主義」というイデオロギーに抑圧されていた女性たちが、それを逆手にとって社会のなかでネットワークを構築し、中心的役割を担っていく過程を検証したのが、真保晶子氏、成田芙美氏、三井淳子氏、菅靖子氏の論文である。真保氏は、室内装飾という「家庭」内の領域で女性たちが実際に権威をもっていたことを、家具発注に際してのやりとりを網羅的に調査することで丹念に裏づけていく。家庭と公共圏との間の壁を貫通して経済が横切っていると指摘したのはハーバーマスだが[2]、女性たちは消費

の実権を掌握することで密接に公共圏と接していたことになる。また、成田氏が提示しているのは、刺繍という「家庭性」の象徴でもあった女性の趣味が、ヴィクトリア朝後半から「芸術」として格上げされ、王立芸術刺繍学校設立を通して制度化されていく過程である。ウィリアム・モリスが牽引したアーツ・アンド・クラフツ運動もまた刺繍の芸術的価値をみいだし、娘のメイ・モリスによって工芸デザインとして昇華されていく。三井氏が焦点を当てるエイダ・バリンとメアリ・サムナは母性の根幹である育児を起点として女性ネットワークを構築していった女性たちである。バリンの『ベイビィ』誌や赤ちゃん博覧会は情報交換の媒体として公共圏を構築し、生活スタイルの改変さえ促した。一方で、サムナのマザーズ・ユニオンは国教会の主教管区公認団体として認定されることで大きな動員力を発揮していく。菅氏が扱うC・S・ピール夫人は、「食」を含めた家庭生活の省力化を推進することで女性たちを「家庭」の桎梏から解放するだけではなく、第一次世界大戦期に男性たちに交じって食糧庁に勤務し、ナショナル・キッチンを創設し、イギリス全土の食生活を変えていった点で、「表」舞台に立ち続けたといっていい。家庭を芸術、文化、社会的美徳として再構築することで、「家庭の天使」だったはずの女性たちが公共空間で実体と名前を、さらには社会的権威さえ確保していったのである。

しかし、「匿名」の女性たちの言動を跡づけていく作業は容易ではない。「匿名」であるがゆえに顔が見えない、声が聞こえないからである。家具の発注書からだけではどれほど妻や娘の意見が反映されているかは見えないし、牧師館の寝室や社交が繰り広げられている居間での会話を立ち聞きするわけにはいかない。史料調査や校正を補助した女性たちがどういう歴史観をもっていたかもわからない。そうした困難に直面しながら、本書の論者たちは扱う女性たちにも負けない忍耐づよさで史料を渉猟し、明晰かつ説得力をもってそれぞれの女性たちの苦境や活躍を提示している。

ただ、本書に登場する女性たちが総じて成功したヒロインばかりであるのは意図的なのか、偶然なのか気になる。苦労して壁を打破した女性たちはドラマになるし、そうした存在に歴史的意義を与えるのが歴史家の義務であるのはまちがいないが、成功物語だけが必ずしも歴史的現実でもない。梅垣氏と出島氏が用いた「自己実現」という表現はすべての論文にも

反響しているように思われるが、その意味で注意が必要かもしれない。どの女性作家たちも「自己実現を追求」したことは確かだが、急進的女性作家たちは「性を失った女ども」として痛烈な諷刺の対象になったし、「匿名性」の桎梏は 19 世紀半ばにいたるまで女性作家たちに課せられる。女性医師たちがインドに赴いたのは、出島氏が指摘するように国内では医師としてよりも慈善事業や保健衛生の仕事しかないからであって、やむをえずの選択肢としてでしかない。19 世紀末から女性の装飾芸術家や服飾デザイナーが登場する一方で、匿名のお針子として取り残されていた女性たちも無数いる。それぞれ異なる「家庭」と「公共圏」との確執を抱えた女性たちにとって本当の意味での「自己実現」とは何だったのかは、各論文を読みながらその都度問い直し、再確認していく必要があろう。「欲ばりな女たち」は後世の読み手にも欲ばりかつ正当な要求をし続ける。

## 注

1. チチェスタのキャリアと多元的な公共圏については Kathryn Gleadle, “Our Several Spheres’: Middle-class Women and the Feminisms of Early Victorian Radicals,” *Women in British Politics, 1760–1860: The Power of the Petticoat*, eds. Kathryn Gleadle and Sarah Richardson (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2000), pp.135–40.
2. ユルゲン・ハーバーマス、細谷貞雄・山田正行訳『公共性の構造転換』第 2 版（未來社、1994 年）44 頁。